

現場での半年間

藤井 和夫 教授

二〇一六年の四月から九月まで、ポーランドのクラクフ市にあるクラクフ経済大学に留学しました。同大学は、本学に二つあるポーランドにおける交換留学協定大学の一つで、一八八二年設立の商業学校にルーツを持ち、一九二五年からの高等商業学校を経て一九五〇年に国立の経済大学となって今日に至っています（現在五学部、学生数二三〇〇〇人）。全国に五つある経済大学のトップを争うとともに、経済学部を持たない一四世紀創立のクラクフの名門ヤギェウオ大学を補う役割を担っているように見受けられ、例えば現在のベアタ・シドゥウオ首相は、ヤギェウオ大学の哲学歴史学部を卒業した後、国会議員になる前にこのクラクフ経済大学にも籍を置いていました。

クラクフに留学したのは、ポーランド商業史

という自分にとっては新しいテーマに取り組むためです。一七世紀初頭にワルシャワに遷都されるまでクラクフが長らくポーランドの首都であった背景には、中世ヨーロッパ商業の中心地としての繁栄がありました。また一九世紀の国土分割による滅亡という苦難の歴史のあと、ポーランドの再興に向けて同市が政治面、文化面で大きな役割を担ったことが知られています。その経済的な基礎は何だったのかを歴史の現場で明らかにしたかったです。

最近の研究を手掛かりにその分野に取り組もうとクラクフに来て分かったのは、意外なことにこちらでもその商業史の研究が現在には少ないという事実でした。そこで受人教授のブロンスキ氏の紹介で、大学と関係が深い国際文化センター(MCK)や一九世紀以来の伝統をもつポー

ランド科学アカデミー(PAU)の図書室にもついてもっぱら古い文献を渉猟することになり、美しい歴史的な町並みや多くの博物館・美術館に恵まれたクラクフに押し寄せる観光客と、昼食の安食堂の席を争う毎日を過ごしていました。

滞在中にニース(仏)でのテロやトルコのクーデター未遂騒動があり、イギリスのEU離脱の国民投票があつて、ヨーロッパの激動が直接体に響いてくるのを感じました。また、ローマ教皇が呼びかけた「世界青年の日」が二百万人近くの世界の若者を集めてクラクフで行われた際の熱狂的な雰囲気や、大学のスタッフや古本屋の主人などと交わした会話から、ポーランドのカトリックや国民感情についていろいろ考えさせられました。保守的な政府の政策をめぐって

世論が分裂する中で、二〇一六ユーロ・カップでのサッカーチームの活躍に、国中が文字通り一つになって応援するのも目撃し、準々決勝のPKでポルトガルに惜敗した時には、滞在していた家族とともにファンと肩を組む気分ですわらず涙してしまいました。社会を研究する人間にとって、テレビドラマの刑事ではありませんが、過去の時代の真の姿についても、現在進行中のできごとについても、現場は本当に多くのことを教えてくれるということを再確認した留学でした。

